

笠原小学校の英語教育の歩み (5)

一慣れ親しみの外国語活動から、定着を求める英語科の取組へー

第5期の研究から (2015年度～2017年度)

The English Education of Kasahara Elementary School from 2015 to 2017.

瀧沢広人

TAKIZAWA Hiroto

[キーワード]	小学校英語教育, 研究開発学校, 指導方法, Content-Based Teaching/Instruction, 文字指導
[所属]	岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University)

[要 旨] 笠原小学校第5期の英語教育研究は、2015 (平成27) 年度～2017 (平成29) 年度にかけて行われた。第5期の特徴は、「定着を求める英語科についての研究」である。評価については、第1期～第4期の研究のまとめ (瀧沢 2020a, 瀧沢 2020a, 瀧沢 2021a, 瀧沢 2021b) において触れることができなかつたため、本稿でそれらを整理した後、第5期の評価をとりあげる。第5期の評価研究では、「問題解決的なパフォーマンス課題」を取り入れている。「問題解決型のパフォーマンス課題」とは、児童に「〇〇をするために◇◇先生と話そう」のように、児童に話す目的を明示し、その目的を達成するためにどのような英語を用いて話したらよいか児童に考えさせる課題である。これは現在の学習指導要領下におけるパフォーマンス評価の原形と言える。「文字や読み書き」についての評価は、文字に特化した単元の後に「ペーパーテスト」で行い、「言語や文化に関する知識・理解」では、単元の終末にチャレンジクイズを行い、その単元における基本表現に関する知識の定着を図っている。「外国語理解の能力」では、パフォーマンステストでの評価の他に、チャレンジリスニングと称したりリスニングテストを行ったり、単語や文を読み、単語や文の意味を表すイラストと線で結ぶ読むことのテストも行ったりしている。このように、慣れ親しみの外国語活動から、確かな学力の定着を確認する評価研究へと研究が大きく進み、英語科としての研究が推進された研究である。

1. はじめに

1.1. 研究の背景

2020年度より小学校外国語が教科化され、教えるべき内容も学習指導要領に記された。そして、その学習指導要領に基づき、教科用図書が作成され、2020年度より小学校5・6年生で使用されている。本研究は、長い時間をかけ、研究開発学校として、現在の英語教育を先導してきた学校の教育財産を、教科書ができた現在も埋もらせることなく、後世に残すことを目的とし、岐阜県多治見市立笠原小学校の英語教育研究を整理し、記録に残すこととし、整理してきた (瀧沢2020a, 瀧沢2020b, 瀧沢2021a, 瀧沢2021b)。第5回目にあたる本稿は、笠原小学校の第5期の英語教育研究を整理し、記録することとする。

1.2. コンテント・ベイストの要件の変化

笠原小学校の研究の中心は、「伝え合う内容を重視したコンテント・ベイストの手法を用いた授業」である。その「コンテント・ベイスト」を成立させる要件は、この第5期までに慎重に議論・検討され、期や年次によって、要件が少しずつ更新されている。

第1期・第2期では、コンテント・ベイストの授業の条件に次を挙げている。

- ① 共通性：すべての児童にとって共通の内容・話題である。
- ② 興味・関心：多くの児童がその内容・話題に興味をもっているか、持つ可能性が高い。
- ③ 楽しい英語活動：その内容・話題を取り上げることで、楽しい英語活動を成立させることができる。

それらの内容を扱うことで、「問題解決的な学習」や「コミュニケーションに有効に働く英語活動」が展開されることを利点としていた。また、第2期には、取り組んでいたコンテント・ベイストの手法を「笠原型

コンテンツ・ベイスト」と命名し、指導計画や指導過程に1つの型を意識し始めている。

第3期では、「笠原型コンテンツ・ベイスト」の要件に、次の4つを示している。

- ① 驚きや発見：児童にとって驚きや発見を生む内容。
- ② 他教科等との関連：教科等の学習内容と関連付けた内容。
- ③ 問題解決的な活動：聞く・話す必然の在る問題解決的な活動。
- ④ 3つの指導過程：3つのステップで無理なく慣れ親しむ指導過程。

これらの要件をすべて満たす授業づくりの手法を「笠原型コンテンツ・ベイスト」と定義した。この第3期で初めて明確な定義を残していることになる。

第4期では1年次に、「笠原型コンテンツ・ベイスト」の要件を見直し、次のように修正する。

- ①驚きや発見（コミュニケーションによって、驚きや発見が生まれる内容）
- ②コミュニケーションの必然性（問題解決的な活動により、コミュニケーションする必然を生み出す場面設定）
- ③他教科との関連（他の教科・領域の既習事項を生かした素材）

さらに第4期の2年次では、それらを次のように修正する。

- ①必然性のある場面設定（問題解決的な活動により「聞く・話す・読む・書く」必然を生み出す場面設定）
- ②興味関心の高い他教科の内容（他の教科・領域で児童の興味・関心が高い学習事項を生かした題材）、
- ③伝え合う値打ち（驚きや発見、気付きの生まれる伝え合う値打ちの高い内容）

また、児童が伝え合う内容を、次のように分類し、児童の活動が複雑かつ困難なものにならないよう話題の範囲を限定した。

- ア 自分の意志や考え
- イ 仲間がもっていない自分だけの情報、オリジナルな情報
- ウ 他の教科・領域の理解を広めたり深めたりすることのできる情報

このように、第1期から第4期にかけての研究の中心は、「笠原型コンテンツ・ベイスト」による授業開発であった。整理すると次のようになる（表1）。

表1 笠原小学校におけるコンテンツ・ベイストの要件の変化

第1・2期	第3期	第4期	
		1年次	2年次
①すべての児童にとって共通の内容・話題である	①児童にとって驚きや発見を生む内容	①コミュニケーションによって、驚きや発見が生まれる内容	①問題解決的な活動により「聞く・話す・読む・書く」必然を生み出す場面設定
②多くの児童がその内容・話題に興味をもっているか、持つ可能性が高い	②教科等の学習内容と関連付けた内容	②問題解決的な活動により、コミュニケーションする必然を生み出す場面設定	②他の教科・領域で児童の興味・関心が高い学習事項を生かした題材
③その内容・話題を取り上げることで、楽しい英語活動を成立させることができる。	③聞く・話す必然の在る問題解決的な活動	③他の教科・領域の既習事項を生かした素材	③驚きや発見、気付きの生まれる伝え合う値打ちの高い内容 ア 自分の意志や考え イ 仲間がもっていない自分だけの情報、オリジナルな情報 ウ 他の教科・領域の
	④3つのステップで無理なく慣れ親しむ指導過程		

			理解を広めたり深めたりすることのできる情報
--	--	--	-----------------------

1.3. 第5期の研究

第5期(2015年度～2017年度)では、慣れ親しみの外国語活動から、定着を求める英語科について研究を行い、「定着を確かめる評価」「文字・読み書きにおける指導」「既習事項の習熟と定着を図るSmall Talk」そして、3つのステップで指導過程を組んできた第4期までの実践に、新たにSmall Talkや文字学習を入れることによる「指導過程の改善」が図られる。第5期の時代背景としては、外国語活動として小学校5、6年生が週1時間(年間35時間)、授業時間割に組み込まれ、共通教材として、Hi, friendsが配付されている。共通教材の使用義務はないが、国としての共通の内容が示された教材となる。2017(平成29)年には、現在の学習指導要領が告示され、第5期の研究が、現在の学習指導要領や小学校の英語授業の指導過程に影響を与えた部分は大きいものがある。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、笠原小学校が歩んできた英語教育の研究を、2020年度の外国語科が教科化となった現在、その教育文化財産として書き残すと同時に、資料からだけでは読み取れない研究の思想や研究開発の考え等を課題として残し、次の研究につなげることにある。

用いる資料は以下である。

- 平成27年度 研究開発実施報告書 第1年次
- 平成28年度 研究開発実施報告書 第2年次
- 平成29年度 研究開発実施報告書 第3年次
- 平成29年度 外国語科 指導計画集

3. 笠原小学校 第5期の研究(2015年度～2017年度)について

3.1. 研究課題

研究開発課題と研究テーマは次である。

(研究開発課題)

国際社会において必要とされるコミュニケーション能力を育成するため、小学校1学年から英語科を開設した場合における、中学校の教育課程を含めた9年間を通じた系統的な教育課程、指導方法及び評価方法の在り方についての研究開発

(平成27年度 研究開発実施報告書 第1年次)

(研究テーマ)

生き生きとコミュニケーションを図る児童生徒を育てる指導の工夫

～「笠原型コンテンツ・ベイスト」の手法を中心とした効果的な小中連携の在り方

(平成27年度 研究開発実施報告書 第1年次, 報告書1)

研究開発課題により、笠原小学校の英語教育研究は、慣れ親しみの英語学習から、定着を求める英語学習へ振り子が振られることとなる。

3.2. 研究課題と目的

伝え合う内容を重視し、問題解決的な活動により、伝え合う必然を生み出す指導方法とした「笠原型コンテンツ・ベイスト」の手法は、第1期から第4期の研究において、その要件の整理が終わり、各種学力調査において、コミュニケーション能力の素地及び基礎に一定の高まりがみられることが検証できた(笠原小学校, 2016: 報告書5)。そこで、第5期の研究として、英語科を見据えた場合に、英語学力の定着、つまり言語材料の知識・理解の定着や正確な運用能力を身に付けさせ、さらに、それらの学力が確実に身につけているかどうかの評価・見届けの必要性を感じる。笠原小学校は、課題として4点をあげ、研究の目的を以下に設定している。

(課題)

- (ア) 言語材料の知識・理解の定着と正確な運用
- (イ) 小学校における英語の文字に慣れ親しむ指導の効果の検証及び計画の修正
- (ウ) 小学校段階に英語科を開設した場合の、外国語活動から英語科への円滑な転換とその効果的な指導方法の究明
- (エ) その場合の小・中学校英語教育の円滑な接続の在り方の究明

(研究の目的)

- (ア) 言語材料の知識・理解の定着と正確な運用に資する指導方法の改善を図る。
- (イ) 単位時間及び帯時間の活動を用いた「読むこと」「書くこと」の指導方法の改善を図る。
- (ウ) 小学校英語科における指導目標及び評価規準の再編成と、外国語活動から英語科への円滑な移行の在り方を究明する。
- (エ) 小・中学校英語教育の円滑な接続の在り方を究明する。

(平成27年度 研究開発実施報告書 第1年次, : 報告書5)

本稿では、笠原小学校の第5期の研究を「評価」及び「習熟・定着を目指すSmall Talk及び指導過程の工夫」の2点に焦点を当てて整理する。

4. 笠原小学校の評価研究

筆者は、笠原小学校が過去において発表した資料を基に、第1期から第4期までの笠原小学校における研究を「笠原小学校の英語教育 (1)」～「笠原小学校の英語教育 (4)」に整理した (瀧沢, 2020a, 2020b, 2021a, 2021b)。それらの論文では、評価という観点からの整理ができていなかったため、今回の研究において、第5期の笠原小学校の評価研究を整理するにあたり、まず第1期からの評価を振り返ってみたい。

4.1. 評価研究：第1期 (2003年度～2005年度)

第1期では、目指す姿として、「コミュニケーションへの関心意欲態度」「聞く姿」「話す姿」から学年ブロックの目標を定めている。話す姿では、次のような目標段階を設定している。

表2 話す姿における目指す姿 (児童像)

つくし学級	1・2年生	3・4年生	5・6年生
<ul style="list-style-type: none"> ・はっきりとした口調で話す。 ・英語の音を真似ようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き手を見て話す。 ・聞き手が理解できる声量ではっきり話す。 ・聞いた英語を使おうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・間違いを恐れず話す。 ・身振りや手ぶりを加えて積極的に伝えようとする。 ・聞き手を意識しながら話そうとする。 ・知っている言葉を使うとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自信を持って話す。 ・話題について、自分の考えを言おうとする。 ・いろいろな人と積極的に話そうとする。

また、授業内における評価については、「教師による評価」と「児童による自己評価」の2つの方向で行われ、教師側の評価では、評価の観点と評価上の留意点で分け、児童の自己評価は4つ方法が用いられた。

教師側の評価

<評価の観点>

- ①進んで英語を使おうとする姿
- ②進んでコミュニケーションをしようとする意欲的な姿
- ③eye contact, clear voice, more Englishを意識してコミュニケーションしようとする姿
- ④進んで仲間と関わろうとする姿

<評価の意図>

- ① その場その場で評価し意欲の継続を図る。
- ② 活動の終末で評価し充実感を味わえるようにする。

児童の自己評価

- ① 評価カードに記入する。
- ② ワークシートに記入する。
- ③ 学習して思ったことについて発表する。
- ④ 教師の評価にかかわる質問に対し挙手する。

「平成16年度 笠原町一貫教育自主発表会（研究紀要・指導案）」（2004：24）より

これらについて、第1期では、評価が見える形で残していくのは有効としつつ、TT体制における評価方法の在り方や、どのような評価項目を設定すればよいのか、またどのように活用していけばいいかが、今後の検討課題として残された（平成17年度研究開発実施報告書第3年次, 2005：86-87）。

4.2. 評価研究：第2期（2006～2008年度）

第2期の評価研究では、「コミュニケーション力育成の段階表」の策定が特徴的である。笠原小・中学校（2006）では、第1期の「目指す姿」を踏襲しつつも、小中連携を視野に入れ、幼稚園・保育園から中学校卒業までを4つの段階に分け、「Content-basedの手法を用いたコミュニケーション力育成の段階表」を作成している。第1期の「目指す姿」では、「態度面」を重視した到達目標になっていたが、第2期では、同じ技能の「話すこと」においても、次のように「能力」としての段階表を示している（表3）。

表3 Content Basedの手法を用いたコミュニケーション力の段階表

Stage 1 幼稚園・保育園 ～小学校初期	Stage 2 小学校1学年～4学年	Stage 3 小学校5学年 ～中学校1学年	Stage 4 中学校2学年～3学年
英語を使うことに慣れる （語から句へそして文へ 事実を話すことから考えを話すことへ）			
・英語を聞き、その音を真似る。 ・単語で伝える。	・簡単な英語を用いて質問したり、答えたりする。	・簡単な英語を用いて質問したり、説明したりする。	・簡単な英語を用いて、考えや意見など自分の思いや願いを話す。

評価研究については、第1期と同様、「教師側の評価」と「児童による自己評価」が行われている。また、第2期では、新たに、「児童面接調査」（パフォーマンステスト）を実施している。これは、スピーキングによる児童の英語運用能力を測るもので、次の方法で行われた。

（方法）

対象：1年～6年までの各学年1クラスを抽出。

内容：描写力の測定

児童は1枚の絵を見て、そこに描かれていることについて英語で試験官に話す。

（1分間絵を見て、次の1分間で何が描かれているか伝える）

分析：児童の発話を文字に起こし、児童の発話数（情報数）を、単語、句、文の3つに分類し調べる。

結果の詳細は、瀧沢（2020b）に記した。

4.3. 評価研究：第3期（2009～2011年度）

第3期では、「笠原校区幼保小中一貫教育（英語）における指導段階表」の作成に取り組み、2008年に学習指導要領が改訂されたことを含み、学習指導要領の目標に準じた表記となっている。さらに第2期の「コミュ

コミュニケーション力育成の段階表」を発展させ、「話すこと」では、次のような段階表を悪性している（表4）。

これについては、第2期と比較して、Stageの区切り方に若干の変更があることと、中学校の目標には、「聴き手を意識して」とある。勝手に一方的に話すのではなく、聴き手のことを考え、時には理解を確認したり、ゆっくりはっきり話したりする配慮が第3期で取り入れたことがわかる。

表4 笠原校区幼保小中一貫教育（英語）における指導段階表

Stage 1 幼稚園・保育園 ～小学校第1学年	Stage 2 小学校第2学年～第4 学年	Stage 3 小学校第5学年～中学 校1学年	Stage 4 中学校2学年～3学年
・簡単な表現で話される英語を聞き、その音声を真似たり、単語や簡単な文で意志を伝えたりする。	・簡単な英語を用いて質問したり、答えたり、事実や考え等を話したりする。	・簡単な英語を用いて質問したり答えたり、まとまりのある簡単な文で事実、考えや意図、気持ち等を話したりする。	・まとまりのある簡単な英語を用いて、自分の考えや意図、気持ち等を聴き手を意識して話す。

また、笠原小学校では、笠原小学校におえる「育てたいコミュニケーション能力の素地」の段階表も作成している。これも、「話すこと」を参考に例としてあげる（表5）。

表5 笠原小学校におえる「育てたいコミュニケーション能力の素地」の段階表

高 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・場面や相手に応じて適切な表現を選んで話そうとする。 ・相手の興味に応じて、適切な話題を選んで話そうとする。 ・文章の構成を工夫して、まとまりのある内容を話そうとする。 ・相手の話を引用しながら、自分の意見や考えを話そうとする。 ・聞き手が理解できないときに、別の表現に置き換えて話そうとする。 ・自分の考えに理由を付けて話そうとする。
中 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・質問を織り交ぜて、聴き手の考えを引き出そうとしながら、話に巻き込むように話そうとする。 ・ジェスチャーや絵等、非言語の手段を用いて、聴き手に分かりやすく話そうとする。 ・OK?/You see?/Do you understand?等の表現を用いて、聞き手が理解しているか確認しながら話そうとする。 ・聞き手の表情を見て、話を理解しているか確認しながら話そうとする。
低 学 年	<ul style="list-style-type: none"> ・大切な部分に強勢を置いたり、大切な部分を繰り返したりして、伝えたいことを強調して話そうとする。 ・絵や写真、具体物等を指し示して、わかりやすく話そうとする。 ・聞き手に伝わる適切な音量と、明瞭な音声で話そうとする。 ・相手の目を見て、聞き手に注意をはらって話そうとする。 ・穏やかな表情（笑顔等）で、聞き手をリラックスさせて話そうとする。

以上の目標設定の他、評価については、単元の指導計画の中に「評価規準」を3観点で作成し、単元における評価規準の設定に取り組んでいる。

4.4. 評価研究：第4期（2012～2015年度）

第4期では、「外国語活動の目標の具体化」を目指し、外国語活動の目標と各学年の目標等を設定している。第3期の「コミュニケーション能力の素地の段階表」を基に、大きく3つの構成から作成している。1つは、

「外国語活動の領域別目標」とあり、聞く・話す・読む・書くの領域別目標が示されている。例えば、「話すこと」では、「身近な内容について話すことに慣れ親しむとともに、日本語と外国語の違いや世界の生活や習慣、文化等について体験的に理解し、場面や条項、相手に応じて適切に話すなど、積極的に外国語を話す態度を育てる」としている。このような目標が、「聞く」「読む」「書く」の各領域でも同様に作成されている。2つ目は、「外国語活動で目指す姿」である。ここには目指す姿として「外国語に慣れ親しみ、進んでコミュニケーションを図ろうとすることができる」とある。つまり、これが、笠原小学校の目指す児童像となる。3つ目で、「各学年の英語活動の目標」である。1学年から6学年までの目標が記述されている。特徴的なことでは、「聞くこと」で、1・2年生では、「1文程度の英語を聞いて」となっており、3・4年生では、「2～3文の英語を聞いて」、5・6年では、「4～5文の英語を聞いて」と、聞く英文の量の目安が書かれている点である。また、「話すこと」でも同様に、1・2年で1文程度、3・4年で2～3文程度、5・6年で4～5文程度の英語を用いて、とある。このように数値を示すことで、目指す目標を具体的なものにしていく。

評価については、第3期と同様、評価規準を見直す作業が行われ、同時に、より言語材料を平易なものに修正することなどを行っている。

4.5. 評価研究：第5期（2015～2017年度）

本研究の第5期における評価研究では、研究開発課題に伴い、英語科ということで慣れ親しみの指導から定着を求めた指導、さらに適切に評価をするということから、評価の研究に力が入れている。まず、中学校英語の評価観点に従い、小学校外国語科の観点を4つにしている。また、4つの観点をそれぞれ2つずつの項目に分け、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」は、「言語活動への取組」と「コミュニケーションの継続」、「外国語表現の能力」及び「外国語理解の能力」は、それぞれ「正確さ」と「適切さ」、「言語や文化に関する知識・理解」では、「言語についての知識」と「文化についての知識」というように、合計8つの評価観点になっている。また、観点多さから、単元内ですべては評価しきれないこともあり、観定の枠としては8つあるが、評価を試みないところは、斜線を引き、評価項目の精選を図るようにしている（表6）。

表6 評価規準の例「発見 岐阜県のみ力」

コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化に関する知識・理解
①言語活動への取組 相手の話 Really? Me too.等、驚きや乾燥の言葉を付け加えながら積極的に聞いている。	①正確さ (評価しない)	①正確さ 理想の部屋の特徴や県内市町村の代表的な場所や食べ物、産業等について情報を正しく理解することができる。	①言語についての知識 理想の部屋の特徴や県内市町村の代表的な場所や食べ物、産業等について問答する言語材料を正しく理解している。
②コミュニケーションの継続 (評価しない)	②適切さ (評価しない)	②適切さ 聞き取りにくかった時に、自信のない言葉を上昇口調で繰り返し、相手に確認しながら聞くことができる。	②文化についての知識 (評価しない)

評価研究として、次の実際の評価方法の研究が行われている。評価方法の1つに「パフォーマンステスト」がある。パフォーマンステストは、前期に2回、後期に2回の合計4回実施している。

このテストでは、「コミュニケーションに関する関心・意欲・態度」「外国語表現（話すこと）の能力」「外国語理解（聞くこと）の能力」を測るために実施する。

パフォーマンステストは、2年次の反省を生かし、授業と同じように「問題解決的なパフォーマンス課題」

となるように作成している。例えば、次のような課題シートを作成し、パフォーマンステストを実施している（図1：レイアウトについては筆者が変えている）。

図1 パフォーマンステスト「スコアリングシート」

5年生第3回パフォーマンステスト 《得点表》 氏名 ()

今回のミッション

長野県のみりよくをたくさん伝え、〇〇先生に「行ってみたい」と言わせよう！

2分間で、長野県で食べられるものや見られるもの、買えるものなど、イチオシ情報を紹介して、〇〇先生に「ぜひ行ってみたい」と思わせるプレゼンをしよう！

《話す力》

都道府県の魅力について様々な内容を8文以上で伝えることができた。 ◎ ○ △

授業で学習した英語を正しく使って話すことができた。 ◎ ○ △

《コミュニケーションがうまくいくための態度・技能》

アイコンタクトを大切にしている。 ◎ △

スマイルを大切にしている。 ◎ △

質問をして相手を話に巻き込みながら話している。 ◎ △

稚拙な言葉を強調して話している。 ◎ △

☆〇〇先生に、「そこに行ってみたい！」と言わせようという ◎ ○ △
ミッションを見事達成できた！

がんばりましたね。次回は2月を予定しています。
今回よりも◎が増えるようがんばろう！

問題解決型のパフォーマンステストとは、児童に「〇〇をするために◇◇先生と話そう」のように、児童に話す目的を明示し、その目的を達成するためにどのような英語を用いて話したらよいか児童に考えさせる課題である。これは、現在の学習指導要領で示す「コミュニケーションにおける目的・場面・状況」を、この研究開発校時代から、大事にしていたことになる。

2年生の「ALTの先生が好きな具材でスープを作ろう」では、ALTとやり取りをした後、スープが完成しているようになる。1年生では、「先生と楽しく英語で会話しながら、ビンゴゲームをしよう」とし、「アイコンタクト」「スマイル」「聴き手の理解を確かめるOK?」を「関心・意欲・態度」の評価項目とし、「適切な音量、明瞭な音声で話す」「英語の特有の音やイントネーションで話す」は、「表現の適切さ」を評価するなど評価シートもパフォーマンス毎に作成している。

また、児童によっては、緊張してしまうこともあることから、低学年においては、ゲーム的な要素を盛り込んだり、ALTがエプロンをつけた八百屋に扮したり、普段の授業のような環境で行うことへの配慮をしている。

さらに、パフォーマンステストには時間が必要であるということから、時間制限を設けたり、前の児童がやっているときに、次の順番の児童の考える時間としたり、順番が来たら、すぐに始められるよう時間を有効に使える工夫をしている。

「文字や読み書き」についての評価は、文字に特化した単元の後に「ペーパーテスト」で行い、「言語や文化に関する知識・理解」では、単元の終末に5問程度からなるチャレンジクイズを行い、その単元における基本表現に関する知識の定着を図る。「外国語理解の能力」では、パフォーマンステストでの評価の他に、チャレンジリスニングと称したリスニングテストや、単語や文が書いてあり、その単語や文の意味を表すイラストと線で結ぶ「読むこと」のテストも行っている。また、児童にとって目指したい姿を一覧にした「CAN-Doリスト」を作成し、単元が終わるごとに個々の達成度に合わせて色を塗ることを行い、自己評価できるようにしている。

このように、第5期の研究では、評価についての研究が大きく進み、英語科としての定着を求めた指導と評価の一体化を図っている。

4.6. Check Timeの導入

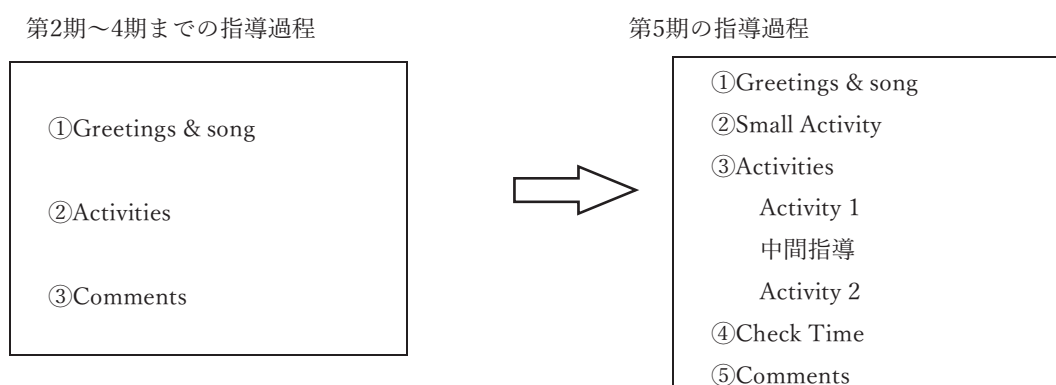
第2期～第4期の指導過程と第5期の指導過程を比較してみると、新たにCheck Timeが設定されていることがわかる。このことについては、笠原小学校（2017）の報告書において、次のように説明し、Check Timeの時間の扱いを定義している。

授業の終末には、本時のねらいの達成状況を確認するためのCheck Timeを位置付けた。「外国語表現・外国語理解の正確さ」を測ることを目的とし、その時間の中心となる指導内容に合わせて、聞くことを指導の中心とする単元では、正確に聞き取ることができるようになっているか、話すことの指導を中心とする単元では、正確に発話することができるようになっているかを測ることができる活動を組んだ。

（笠原小学校，2017：報告書12）

指導事項の定着を目指す第5期の研究において、研究が大きく進んだ第5期である。

また、指導過程は、次のように大きく変化がみられる。従来の3つのステップの指導過程に、次のような新たなステップが加わる形となる。



ここでは、授業の冒頭で行うSmall Activity（Small Talk）が取り入れられている。英語科ということから、既習事項の定着を求める指導を必要とするため、授業の冒頭において、Small Activity（Small Talk）を行う設定になっている。Small Activityのねらいは、既習事項の習熟・定着であることから、扱う言語材料は、基本的に既習事項である。既習事項を繰り返し使用することで、習熟・定着をねらう対話的な活動とし、時間を5分程度としている。

5. まとめ

第5期では、研究開発課題「国際社会において必要とされるコミュニケーション能力を育成するため、小学校1学年から英語科を開設した場合における、中学校の教育課程を含めた9年間を通じた系統的な教育課程、

指導方法及び評価方法の在り方についての研究開発」により、慣れ親しみの外国語活動から、定着を求める英語科の取組へと研究の方向性が大きく変わった時期である。そのため、最低限身に付けさせたい言語材料の精選や、定着につなげるべき言語材料について考えを深め、指導過程を工夫し、取り扱う内容を見直す等、第5期の研究は推進された。その中で、最も中心となり、力を入れたことは「評価」である。第1期から第4期まで、目指す児童の姿の明確化を図りつつ、単元の指導計画に評価規準を載せ、見直しを図ることはそれまでの研究で行ってきた。しかしこの第5期では、評価規準の見直しも同様に行った上で、実際に「話す・聞く」能力を測ったり、適切に聞く能力を測ったりするパフォーマンステストや、読むこと・書くことのペーパーテスト、言語や文化に関する知識理解を測るチャレンジクイズ、聞き取りの力を測るリスニングテスト等を実施したり、実際の評価方法についての研究が大きく進んだ。また、習熟や定着を測る活動として、今でいうSmall TalkであるSmall Activity（報告書の中では、Small Talkという言い方もしている）実践につながる。単元内のActivityに対して、小さなActivity、少しの時間でやるActivityということから、Small Activityと名付けたのだろう。しかしながら、たとえ5分でも新たな指導過程が入ることで、主となるActivityへの時間がかけられなくなるという悩みも報告されている。新しい学習活動を入れると、時間は有限であるため、どこかの活動を削らない限り、時間内に収まらないのは当然である。さらに、文字に慣れ親しむ時間も単元に組み込んでいる。「文字に慣れ親しむことに特化した時間」とし、いわば集中的に指導する。笠原小学校の強みは、授業時間（E学習）の他に、英語（文字を含む）に慣れ親しむ時間（E活動）、実際にコミュニケーションを図り、使うことを楽しむ時間（E体験）等の帯学習や体験学習が充実している点である。

6. 終わりに

笠原小学校の全5期の研究開発を振り返り、それらの多くの研究内容が、現在の小学校学習指導要領（外国語活動・外国語科）に反映されていることが分かった。研究開発に携わった先生方の前向きな姿勢や、外国語教育をよりよくしようと考え、工夫やアイデアを捻出し、自らの教育実践を評価しながら研究を進めていく姿を改めて実感した。教科書ができた現在、このように教育実践を生んできた研究開発学校の努力が無にならないよう、各校・各教職員で創意工夫のある外国語教育の展開を望む。

参考文献

- 笠原町立笠原小学校・笠原町立笠原中学校（2004）。「平成16年度 笠原町一貫教育自主発表会（研究紀要・指導案）」
- 多治見市立笠原小学校・多治見市立笠原中学校（2006）。「平成17年度研究開発実施報告書第3年次」
- 多治見市立笠原小学校・多治見市立笠原中学校（2007）。「平成18年度研究開発実施報告書第1年次」
- 多治見市立笠原小学校（2016）。「平成27年度研究開発実施報告書 第1年次」
- 多治見市立笠原小学校（2017）。「平成28年度研究開発実施報告書 第2年次」
- 多治見市立笠原小学校（2018）。「平成29年度研究開発実施報告書 第3年次」
- 瀧沢広人（2020a）。「笠原小学校の英語教育の歩み（1）－第1期（2003-2005年度）－」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学 第69巻 1号』
- 瀧沢広人（2020b）。「笠原小学校の英語教育の歩み（2）－第2期（2006-2008年度）－」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学 第69巻 1号』
- 瀧沢広人（2021a）。「笠原小学校の英語教育の歩み（3）－第3期（2009-2011年度）－」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学 第69巻 2号』
- 瀧沢広人（2021b）。「笠原小学校の英語教育の歩み（4）－第4期（2012-2014年度）－」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学 第70巻 1号』